

南画史研究からみた『古畫備考』 卷 26、27 を端緒として

東京造形大学 星野鈴

『増訂古畫備考』は美術史研究に必須の書と考えられているが、南画史を研究する場合には殆ど利用しないというのが実状かと思う。稀に貴重な情報がいってはいるものの、南画家の記述に関しては総じて出版物からの引用が多い上に、落款印章についても南画作品自体が豊富に現存しているため基礎史料としての価値が低い、というのがその主たる理由ではないかと思う。その意味で『古畫備考』が今日の南画研究を規定してきたとは考えにくい、反面、南画史研究上で『古畫備考』に対しての史料批判がなおざりにされてきたという現状も否定できない。そうした反省に立って、『古畫備考』とは、朝岡興禎という狩野派の中枢部にいる人物が、彼の生きた時代、即ち 19 世紀前半の南画情報をリアルタイムで発信した書であるという、そのことに注目し、検討を加えておく必要があると考える。

本研究は平成 15 年～17 年度科学研究費「基盤研究 B」 江戸時代における〈書画情報〉の総合的研究（代表；玉蟲敏子氏）プロジェクトに参加して行ったものであり、全巻に目配りしつつ、基本的には私の担当部分である巻 26、27 を中心に上記の検討を行った。

『古畫備考』に対し冒頭に記したような印象を持っていたため、検証はまず今日一般的に南画史で取り上げられる画家が全体にどの巻に入れられ、その記述が何によっているのかを整理することからはじめた。その結果、例えば、今日では南画史を語る際に欠くことの出来ない青木木米への言及箇所がないことや、初期南画家の南海や淇園の扱い、朝岡周辺の南画家の扱いに特色があること、また、朝岡が『畫乘要略』『近世逸人画史』に依拠して執筆することが多かったこと、情報提供者達のことやそのネットワーク、朝岡の情報取得の実体などが見えてくるが、それらを通して南画や上方絵画に対する御用絵師側からの見方を知り得たし、『古畫備考』全巻の中での巻 26、27 の意味するところも見えてきた。

また、巻 26、27 の『増訂古畫備考』増訂箇所の検討から、原本『古畫備考』の東京美術学校収蔵の時期が従来の説より遡ることもわかり、『増訂古畫備考』出版の背景に好古社という古物愛好の結社の存在、活動があったこと、皇室博物館美術部に勤務していた片野四郎が大きく貢献していたことなどを指摘し得た。こうした出版時の増訂の経緯は、日本における近代美術史学の成立期の一側面を物語っているように思われるのである。